

学位論文要旨

学位論文題目 『源氏物語』の人生儀礼に関する研究
申請者氏名 趙曉燕

本研究は、平安期に成立した『源氏物語』を対象として、そこに描き出された様々な人生儀礼を考察するものである。『源氏物語』の人生儀礼について、従来の先行研究は、故実考証的な観点や、歴史学的な観点からアプローチする傾向にあった。それに対して、本研究は、民俗学や文化人類学の方法を導入することで、『源氏物語』に描かれた儀礼を分析し、その本来的な構造や意味を明らかにしていく。そして、人生儀礼を契機として登場人物たちがどのような変革を遂げるのかについて考察を展開することになる。このような問題意識と研究方法に基づき、本研究では、以下の人物たちの人生儀礼を考察の対象とした。

第一章『源氏物語』における夕霧の成人儀礼—籠りの時空としての二条東院—では、光源氏の息子である夕霧の成人儀礼（元服）を考察した。夕霧は、少女巻で元服を迎える。当時、上流貴族の子弟は元服後、すぐに政治の世界へ参入するのが慣例であった。しかし、光源氏は夕霧に大学寮入学という進路を歩ませてゆく。注目すべきは、夕霧の大学寮生活「籠る」という表現によって語られてゆく点である。「籠る」という語には、隔離された時空に一定期間滞留し、聖なる力を獲得するという発想が認められる。これは成人儀礼に通じるものでもある。本稿では、夕霧の元服と大学寮入学という一連の物語展開の中に、諸文化に観察される成人儀礼の本来的な構造が組み込まれていることを明らかにした。

第二章『源氏物語』における明石姫君の生誕・生育・成人儀礼—裳着による転身と越境—では、光源氏の娘である明石姫君の人生儀礼の諸相を考察した。本稿でまず注目したのは、明石姫君の誕生から袴着に至る物語の文脈において、姫君に関係して「口惜し」という表現が頻出する点である。光源氏によって領導される姫君の人生儀礼とは、姫君の身に存在する「口惜し」き要素を段階的に取り除く営みとしてあると捉えた。また、本稿では姫君の裳着という儀礼についても考察を展開した。特に、裳着において重要な役割を果たす腰結役に着目し、その「腰結役」に込められた象徴的な意味を検討した。その結果、秋好中宮が明石姫君の裳着の腰結役を務めることには、伊勢の神の聖なる力を借り受けて転身するという象徴的意味が含まれているとの見解を得た。

第三章『源氏物語』における女三の宮の結婚儀礼—媒介者としての乳母—では、女三の宮の結婚に関わる一連の叙述を儀礼の構造という観点から論じた。なかでも、その儀礼的構造上の重要なプロセスとなる婿選びに注目し、そのプロセスに関与してくる女三の宮の乳母に焦点を絞って考察を展開した。本稿では、乳母という媒介者が、女三の宮の結婚の正当性を保証する一方、女三の宮の皇女としての神聖性を保証する役割をも果たしていると論じた。

第四章『源氏物語』における光源氏の祝賀儀礼—儀礼の場による権力の移譲—では、光源氏の長寿を祝う祝賀儀礼を考察した。本稿では、祝賀儀礼の場が、光源氏の引退を促し、更には次代の権力候補者である鬚黒大将の存在が増大してくる契機となっていることを、「うけばる」や「下形」という表現を手掛かりに論じた。また、諸民族の王権交代に関する伝承の構造として〈転倒儀礼〉が認められることを踏まえ、それと同様の構造を光源氏の祝賀儀礼に見出した。

第五章『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼—呪術による境界の設定—では、光源氏の正妻である葵の上の葬送儀礼を考察した。物語は葵の上の死を語る文脈において、招魂、遺体損壊、葬送、追悼といったプロセスを描出してゆく。本稿では、その中の遺体損壊に注目し、そこに描かれている醜い死の意味を検討した。検討するにあたり、記紀神話に見られる「黄泉国訪問譚」を参照し、境界を画定するための契機として醜い死の描写があることを論じた。

結論では、各章で取り上げた登場人物と人生儀礼の関係を総括し、物語に描かれている人生儀礼が、登場人物たちの造形的変革を促し、実現していくための契機として機能していると論じた。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 86号	氏名	趙 曉 燕
論文題目	『源氏物語』の人生儀礼に関する研究		

(論文審査概要)

本論文は、平安期に成立した『源氏物語』を対象として、そこに描かれている生誕・生育・成人・結婚・祝賀・葬送といった人生儀礼に注目し、それら諸儀礼を文脈の中に組み込む物語の論理や人物造形の方法について解明したものである。登場人物が人生儀礼を経験することの意味とは何か。この問題を考える上で本論文が採用するのは、文化人類学の方法である。具体的には、儀礼の持つ本来的な構造や象徴的な意味を諸文献に見られる事例から帰納的に導き出し、そういった構造や意味を補助線として、人生儀礼が物語においていかなる契機として機能しているかについて論じるものとなる。

本論文は、序章と、五つの章にわたって展開される各論部分、そしてそれらを総括する結論によって構成されている。また、巻末には、各論を展開するにあたって参照した種々の語の用例調査表と、各章毎の参考文献目録を収める。その構成は以下の通りである。

序章：『源氏物語』の人生儀礼に関する研究の可能性

第一章：『源氏物語』における夕霧の成人儀礼—籠りの時空としての二条東院—

第二章：『源氏物語』における明石姫君の生誕・生育・成人儀礼—装着による転身と越境—

第三章：『源氏物語』における女三の宮の結婚儀礼—媒介者としての乳母—

第四章：『源氏物語』における光源氏の祝賀儀礼—儀礼の場による権力の移譲—

第五章：『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼—呪術による境界の設定—

結論

付録資料

参考文献

1. 創造性

従来の『源氏物語』研究では、儀礼を考察の対象とする場合、故実考証的な観点や歴史学的な観点から論じられる傾向にあった。これらは概ね、古記録等の文献によって儀礼の実態を探ったり、延喜・天曆から寛弘にかけての史実との即応を測ったりという方法が採られている。それに対して本研究では、平安期の文献に加え、東アジアをはじめとする世界の諸地域に分布する神話や民俗などをも積極的に参照しており、そこに本研究の新規性が認められる。

例えば第一章では、男子の成人儀礼（元服）を考察するにあたり、オーストラリアの諸族、中国の少数民族（瑶族）、台湾の卑南族、及び鹿児島県や奈良県などで見られる成人儀礼が参照され、それらの事例に共通する構造として、〔I〕母系集団からの分離、〔II〕一時的な隔離生活、〔III〕特別な教育、というプロセスがあることを論じ、物語の新たな分析視点としてそれを導入している。

第二章では、女子の成人儀礼（装着）を考察するにあたり、日本の記紀神話（斎宮起源譚や倭建命の命名譚）が参照され、「装」という衣装の持つ象徴的意味を論じ、それを物語の新たな解釈コードとして導入している。

第三章では、結婚儀礼を考察するにあたり、古代中国の神話（女媧や高禩）が参照され、神婚の成立要件として機能する媒介者の存在に注目し、それを物語の人物造形の理解に投影させている。

第四章では、祝賀儀礼を考察するにあたり、アフリカの諸族に見られる即位儀礼が参照され、儀礼の場で繰り広げられる権力交代劇の構造を抽出し、その構造を物語にも見出している。

第五章では、葬送儀礼を考察するにあたり、中国や日本の習俗（招魂作法）、及び日本の記紀神話（黄泉国訪問譚）が参照され、そこに生と死の境界を画定していく契機が構造化されていることを論じ、それを物語の場面展開の論理として導入している。

このように本研究は、日本の平安時代というコンテクストに縛られるのではなく、時間と空間を超えて広く事例を求めており、そういった事例を媒介として導き出された結論は、『源氏物語』の新たな価値を見出だすとともに、この作品の持つ普遍性を保証することにもなっている。以上の点をもって、本研究の創造性を極めて優れているものと判断した。

2. 論理性

本研究が補助学として導入しているのは文化人類学や民俗学であり、これら諸学の特徴は、構造に注目する点にあると言える。構造に注目する視点から採集された事例には時代的限定性が存在せず、それゆえそこには、文化の始原的な姿や本来的な構造を探る方が拓かれてもくる。しかし一方で、そういった共時的視点の導入は、一回的なものとして生じた『源氏物語』の特殊性をどう掬い取るのかという問題を抱えることにもなる。このような問題に対し、本研究では物語に表わされた語（＝表現）に着目することでそれを担保する。構造的な観点から得られた仮説を、物語の表現によって丹念に検証し、『源氏物語』の一回的な表現の達成として人生儀礼の構造が組み込まれていることを論証するのである。こういった展開の方法は各章で一貫しており、本研究の強い論理性を窺わせる点と言える。

例えば第一章は、夕霧という登場人物の成人儀礼を論じたものであるが、諸文化の成人儀礼で観察される一時的な隔離生活に相当するものとして夕霧の大学寮生活があることを、「籠る」という表現によって検証する。そして、夕霧にとって「籠る」経験は、血縁集団から分離し、独自の属性を付与されていく契機として機能していると論じる。

第二章は、明石姫君の生誕・生育・成人という各段階の人生儀礼を論じたものであるが、姫君の誕生から袴着に至るまでの諸儀礼を描いてゆく物語の行文に「口惜し」という表現が頻出する点に注目する。そして、姫君の人生儀礼とは、この姫君の劣性を意味する「口惜し」き要素を段階的に取り除き、帰属性を変更する契機として機能していると論じる。

第三章は、女三の宮の結婚儀礼を論じたものであるが、結婚の成立要件として媒介者の存在が重視される慣習を平安期の諸文献や古代中国の神話などで確認し、女三の宮の結婚もそれに準拠したものであることを「さるべき人」という表現の使用状況から検証する。そして、女三の宮の結婚において媒介者が果たしている機能を、結婚の正統性や、皇女としての神聖性の保持にあると論じる。

第四章は、光源氏の長寿（四十歳）を祝う祝賀儀礼を論じたものであるが、諸民族の王権交代に関する伝承に、抑圧された下位者が権力の獲得を主張する〈転倒〉の構造が見出されるとし、その〈転倒〉に相当するものとして祝賀儀礼の場における鬚黒大将の誇示行動があることを、「うけばる」という表現によって検証する。そして、光源氏の祝賀儀礼が、次世代の権力候補者である鬚黒大将の存在感を増大化し、光源氏の引退を促す契機として機能していることを論じる。

第五章は、葵の上の葬送儀礼を論じたものであるが、葵の上の死を描く物語の行文に、遺体損壊に関する叙述が見られる点に注目する。そして、その特異な表現の在り方について、葬送の習俗や神話を参照しつつ考察し、そこに〈生者／死者〉という境界画定の契機が孕んでいることを明らかにした。

このように本研究は、儀礼を構造として捉える視点を導入しつつ、そういった構造が物語の文脈の中にどう組み込まれているのかについて、表現を手掛かりに検証しており、その論証の手続きは着実なものとなっている。また、各章の冒頭に「問題提起」の節を掲げ、末尾に「結論」を置く構成は全章を通して一貫しており、論理展開に対する意識の高さを窺わせる。以上の点をもって、本研究の論理性を極めて優れていると判断した。

3. 厳格性

本研究では、論を展開する前提として、序章において先行研究の状況が概観されている。『源氏物語』の人生儀礼に関する研究については、故実考証的研究、歴史学的研究、民俗学的研究という三つの研究方法があるとし、故実考証的研究については、基本文献となる中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙書房、1962年）、山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀礼と歳時』（至文堂、1991年）、歴史学的研究については、近年の研究成果となる小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、2007年）、小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、2012年）を取り上げ、研究の動向が押さえられている。また、本研究の方法と立場を同じくする民俗学的研究については、折口信夫や、その折口の発想を『源氏物語』研究において展開した林田孝和の研究を取り上げつつ、林田の方法を資料の時代的限定性に拘束されているとして、構造に主眼を置く本研究の立場との違いを明確にする。なお、この構造に着目する立場とは、Claude Lévi-Strauss や Edmund Ronald Leach の提唱する文化人類学の方法

であることが説かれてもいる。

この他、各章の冒頭では「問題提起」の節を設け、関連する先行研究の渉獵と整理に努めており、そういった手続きのもとに本研究の立場やプライオリティを規定し、論を展開するという姿勢の遵守は本研究を通して一貫している。以上の点をもって、本研究の厳格性を優れていると判断した。

以上、審査委員4名の合議により、全体として「極めて優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とした。

論文審査結果

⊕・否

審査委員 主 査 (氏名) 坪郷 英

(氏名) 馬 彰

(氏名) 横田尚俊

(氏名) 森野正弘

(氏名) _____